

連載

柔道・友情・平和

第6回

山下 泰裕

早春の旅に思う…その②

ロシアとの「自他共栄」

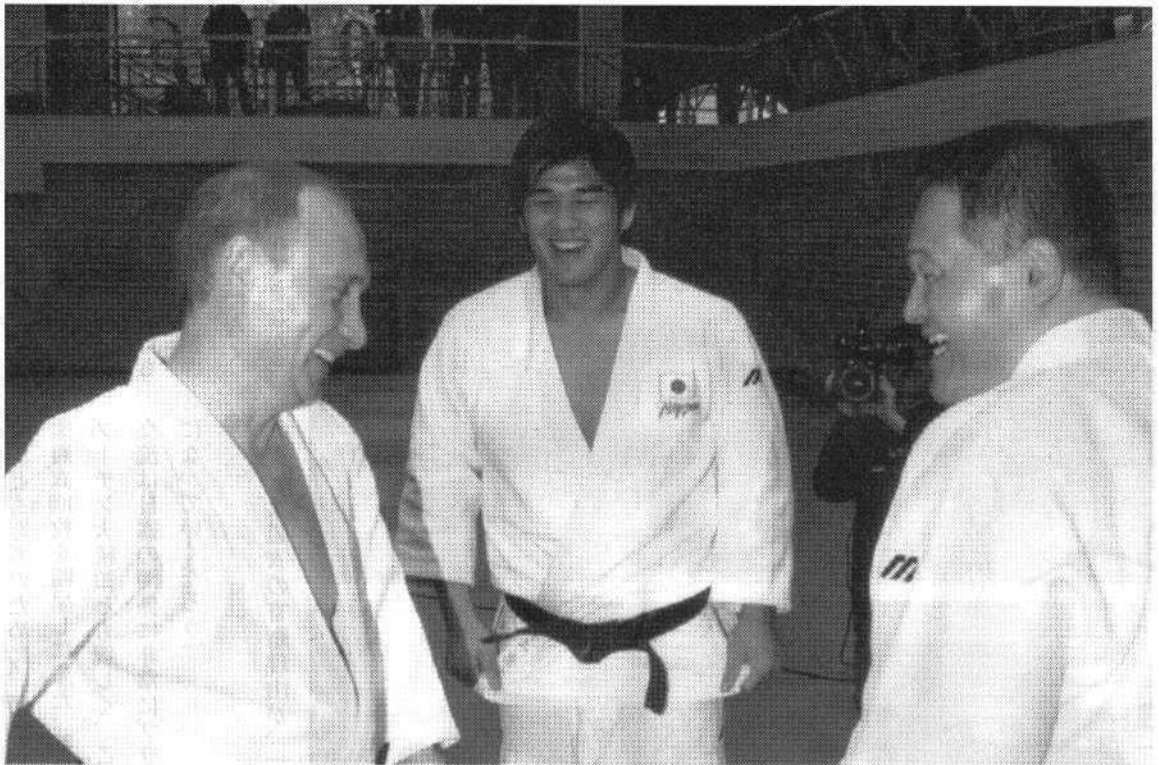
.....

ロシア・レニングラード州の州都サンクトペテルブルク市は、ロシア帝国時代に首都として栄え、ソ連時代はレニングラードと呼ばれた。運河をたたえた美しい町で、エルミタージュ美術館、冬宮殿などの歴史地区が世界遺産に登録されている。

フランスでの柔道指導を終えた私は、2月12日にパリを発ち、同日夜、サンクトペテルブルクに到着した。この地には、これまで4回訪れている。そのうち、思い出深いのは2003年5月の建都300周年記念行事への参加と、2005年12月の柔道指導である。この柔道指導では、井上康生選手を同行し、柔道有段者であるロシア連邦のウラジミール・プーチン大統領と一緒に柔道で汗を流した。大統領は、サンクトペテルブルクの出身で、青年時代にはこの地域最強の柔道選手だった。今回の訪問も、柔道によって培われた信頼によって実現した。

傷ついた子どもたちを励ますために

サンクトペテルブルクを訪れた目的は、ロシア南部・北オセチア共和国ベスラン市の子どもたちに柔道衣と帯を贈呈するためだった。私が理事長を務める特定非営利活動法人柔道教育ソリダリティでは、日本の業者から全面的な協力を得て柔道衣100着、帯100枚を贈ることを決めた。その意向を旧知のシエスタコフ国家議員に話したところ、寄贈式はサンクトペテルブルクでということになり、2003年にプーチン大統領と小泉純一郎首相が会談し、さらに2005年に三人で柔道指導を行った思い出深いスポーツ上級学校の約



ブーチン大統領（左）と談笑する筆者（右）、中央は井上康生選手

250畳敷きの柔道場で挙行することになった。

なぜベスランなのか。これについては、周知のとおり2004年9月にベスラン市で武装集団による学校占拠事件が起こり、7歳から18歳の少年少女とその保護者が高齢になった。結末は350人以上が死亡するという悲劇となったが、実はこの地方は格闘技が盛んで、柔道も普及している。事件で負傷し、また親を失った柔道少年もいた。そのことを耳にした私は、サントペテルブルクの柔道関係者からの相談を受けて、心が傷ついた少年を柔道で激励したいと思い、九州・福岡で開催されている「サニックス旗福岡国際中学生柔道大会」に参加できるよう奔走した。この経緯は西日本新聞社が記事（2005年12月24日付朝刊）として取り上げた。これを機にサントペテルブルクやベスランとの交流が深まり、今では福岡の中学生たちとの相互交流に発展しつつある。

2月13日の寄贈式には、シエス

タコフ議員、ロシア連邦体育スポーツ庁や市議会行政政府、北オセチア州の代表、及び日本総領事館の内田一彦領事、さらに柔道指導者と少年たちが出席した。ざっと数えて100人くらいだったと思う。もちろん式が終わると柔道教室も開かれた。子どもたちの笑顔に囲まれ、真剣な眼差しを五体に感じるときが、最も楽しく嬉しい。

異例のテレビ放映

この日、私は会場を見回して驚いた。テレビカメラが随分と目につく。日本側も含めて10台以上入っている。もちろんテレビ以外のマスコミ関係者も大勢いる。寄贈式への関心の高さがうかがえた。

この日の模様は、翌日朝のテレビで全ロシアに放映された。地元の話によると、3分から5分の時間が割かれていたとのことだ。これは特別であるようだ。また、新聞にも写真入りで報道されていた。通訳者からその内容を聞



豊と柔道衣の寄贈式の様子（ロシア・サクトペテルブルク）

いて、またびつくり。

「柔道の世界チャンピオンが、北オセチアのベスランの子どもたちにも夢と希望を与えるため柔道指導に来てくれた。それだけでなく、彼に会いに来ることができなかつ

た子どもたちのために、豊100枚と柔道衣100枚を贈呈しに来た。彼は、プーチン大統領とも親しく、この交流は日露の関係に非常にプラスになっていくだろう」

豊と柔道衣の寄贈理由が、「私

に会いに来ることができなかつた子どもたちのため」と書かれていた簡所に、「おや？」と思っただが、これも気持ちの表現だから微笑ましい。僅か数日の滞在だったが、寄贈式の前後にロシア側の役員と懇談

する機会があった。その席でのロシア側の発言は、まとめると次のような内容だった。

「現在、日露関係は決してよくない。しかし、柔道の交流では成果を上げている。柔道は単なる格闘技ではない。教育的価値が高いので、人づくりのために多くの子どもたちに勧めたい。今後、日露交流がいろいろ分野へ広がるために、スポーツが先導的役割を果たしてもらいたい」

ロシアでは柔道への関心が高く、私たちのささやかな善意が理解される土壌があるのではないだろうか。柔道によって国際交流、異文化理解が図れる国であると、私は思っている。

国の基本指針は共存

話は変わるが、私が師と仰ぐ東海大学創立者の松前重義先生は、第二次世界大戦後の東西対立、米ソ冷戦時代にソ連・東欧の社会主義諸国との民間外交に尽力された。松前先生は著書の中で、政治



ブーチン大統領に嘉納治五郎師範自筆の掛け軸を贈る

の柱にすべき理念ではないだろうか。冷戦下の非常に厳しい国際環境の中で信念を貫いて民間外交を推進された松前先生に学び、その姿勢を私なりに引き継ぎたい。

嘉納師範揮毫の「自他共榮」を贈る

2004年11月、ブーチン大統領が来日された折に、私は佐藤宣彦先生から頂いた嘉納治五郎師範揮毫の「自他共榮」を贈呈した。大統領は、「これは本物ですか、コピーですか」と質問され、本物と答えると、「私個人のものではなく皆の宝にしたい」と喜ばれた。また、「ベスランの子どもたちへの激励に感謝します」と、御礼の言葉があった。

ブーチン大統領は、常々「柔道は、哲学だ」と話されている。柔道の精神、理想である自他共榮の意味をよく理解されており、柔道を語るときの表情は和やかで楽しそうだった。たかが柔道、されど柔道と、つくづく思う。

を志したときの目標について次のように語っておられる（「私の民間外交二十年」、日本対外文化協会、1986、123頁）。

第一は、軍人たちの政治への介入と支配に反対すること。

第二は、日本を将来、科学技術

を發展させ、経済と文化を中心とした平和国家として再生すること。

第三に、米ソ両国との共存と、そのうえでアジア各国との友好的な外交関係の確立に努めること。

第四は、このような国家的理想

を追求するためにも、教育制度の改革と充実を図る。

松前先生が衆議院議員に初当選されたのは1952年だから、55

年も前のことである。しかし、この目標、理念は現在でも全く色あせていない。それどころか、政策